


情報系に次ぎ基幹系 SAP システムをクラウドへ移行。 パフォーマンス向上と運用負荷軽減を実現

「お好みソース」をはじめ、ソースや酢などの調味料の開発・製造・販売を行う食品メーカーのオタフクソース。同社はビジネス環境の変化に柔軟に対応できる IT 基盤の整備を目指して、従来オンプレミスで稼働していた基幹系システムの SAP とその関連システムを IBM Cloud に移行しました。その結果、パフォーマンス向上とともに、IT インフラの運用負荷軽減を実現。さらにすでにクラウド化している IBM Cloud 上の情報系システムとリソースを共有し、運用効率化も図っています。

- 【導入製品・サービス】**
- VMware on IBM Cloud
 - SAP 認証ベアメタル・サーバー
 - Veeam on IBM Cloud



課題

- 市場環境の変化や顧客ニーズの多様化に迅速に応えられる IT 環境の整備が求められていた
- 基幹システムのクラウド化にあたり、パフォーマンスの向上、運用管理の効率化、BCP 対応等が望まれていた
- 仮想化によるサーバーの集約によるコスト削減が望まれていた
- ハードウェアの保守切れが迫っており、基幹業務である SAP を安心して移行できるクラウドが求められていた

ソリューション

- VMware on IBM Cloud 上の SAP 認定ベアメタル・サーバーを採用し、SAP とその関連システムのサーバーをクラウド上で統合した
- バックアップ・システムとして Veeam を導入するとともに、すでに利用していた情報系システムと IT リソースを共有した

効果

- システムのパフォーマンスが大幅に向上し、夜間処理等の時間を短縮した
- 社内システムのほとんどがクラウド化されたことで、運用負荷が大幅に軽減した
- 情報系システムとの IT リソースの共有により、運用コストを低減した

【お客様課題】

自社に合うクラウド・サービスを選定し、 ビジネスを後押しするための環境を整備する

オタフクソースは、「食を通じて『健康と豊かさ』と和』をもたらす、笑顔あふれる社会に寄与する」という使命のもと、お好み焼をはじめとしたヘルシーで団らんの和をもたらす日本の食文化を広めています。1998年に米国に進出して以来、中国、マレーシア、台湾等、事業の海外展開を推進。2016年にはマレーシアに海外で3カ所目となる工場を稼働させ、その翌年に現地でもハラール認証も取得。国や宗教を問わず、栄養の良いバランス食であるお好み焼きを軸に、食文化を広げる活動をしています。

同社では、市場の広がりとともに、国内市場では一人暮らしが増加するなど、顧客ニーズが多様化してきており、商品開発の強化が求められています。お多福グループのITの管理・運用を担うオタフクホールディングスの経営企画部 IT企画課では、市場環境の変化とビジネスの将来を見据え、オンプレミスで管理してきたシステムのクラウドへの移行に着手しました。経営企画部 IT企画課課長の高野秀弘氏はその背景を次のように話します。

「市場の変化に対応して新しい事業を展開する上で、ITの活用は不可欠です。しかし、ITインフラの運用管理に時間を取られていたのでは、ビジネスサイドの要望にスピーディーに応えることはできません。少ない人数でグループ全体のシステム開発・運用にあたっていることもあり、この課題を解決するためにはクラウド化が効果的だと考えました」

長年、IBM Dominoのユーザーだった同社は2016年3月、IBM Dominoが稼働するサーバーの保守終了を機にまず情報系システムをクラウドに移行し、運用面やコスト面のメリット、デメリットを慎重に見極めることにしました。クラウドは、IBM Dominoが各種アプリケーションと連携していることからIaaS型とし、移行先にはオタフクソースのシステムを支援してきた実績なども評価して「IBM Cloud(選定当時はSoftLayer)」を選定しました。

情報系システムのクラウドへの移行が完了した直後から、同社は基幹系システムのクラウド化に関する情報収集を開始します。まず運用中の「SAP ECC 6.0」の「SAP HANA」へのバージョンアップの必要性について検討しましたが、同社が利用するモジュール機能のサポート状況などを勘案し、見送ることにしました。次に直面したのは、SAPで利用しているデータベースのライセンス費用の問題です。共有型のクラウドでは追加のライセンス費用がかかるため、一般的なパブリック・クラウドではコストアップが避けられません。基幹系システムの移行先は、専有型で利用できるクラウド・サービスに候補が絞り込まれました。

最終的な移行先の選定にあたって、大前提となったのはシステムのパフォーマンスです。「ユーザーの体感が変わらないことが最低条件であり、基幹系システムについてはオンプレミスより遅くなることは許されません」(高野氏)

クラウドはネットワークを介して利用するため、オンプレミスと違って仕様だけでは実際のパフォーマンスを予測できません。同社はどのような構成やサービスを選定すれば求める条件を満たすことができるかについて、クラウド・ベンダー各社に照会しましたが、明確な回答はほとんど得られませんでした。IT企画課シニアスタッフの岩井基氏は「いかにコストを抑えてパフォーマンスを最大化するか。クラウドではそのバランスを取るところが難しいと実感しました」と当時を振り返ります。

ITインフラの運用管理に割かれていた工数が激減したに加え、システム担当者の精神的な負荷も大きく軽減されました。



オタフクホールディングス株式会社
経営企画部 IT企画課
課長
高野 秀弘氏

【ソリューション】

具体的な提案と信頼できる実績からIBM Cloudを選定

そうした中で、具体的な提案をしたのがIBMでした。「IBMはSAPのインフラのスペックを精査して、どのレベルであればどれだけのパフォーマンスが得られるかを具体的に示してくれました」と岩井氏は話します。

「パフォーマンスを大きく左右するストレージの性能も、IBM CloudではIOPS保証型の外部ストレージでギガバイトあたり10 IOPSまで拡張が可能と、性能面で余裕があることも安心材料になりました」（高野氏）

さらに決め手となったのは、IBM Cloudのベアメタル・サーバーが「SAP認証」を取得している点です。SAPシステムの移行作業を担当するSI企業から「パフォーマンスの保証と十分な支援が期待できるベンダーにするべきでは」という示唆を受けたことも、同社の背中を後押ししました。

情報収集と検討を重ねた末に、同社は2017年9月にIBM Cloudの採用を決定し、翌10月から移行プロジェクトをスタートさせました。12月までにハードウェア環境を構築して2018年1月からテストを実施しました。

移行の対象となったのは、SAP本番機と開発機、検証機、SAP Business Warehouse、ジョブ管理、帳票、発注システムなどです。SAP自体のバージョンアップは見送りましたが、周辺システムはすべて最新バージョンに引き上げました。バックアップ・ソフトは新たにVeeam on IBM Cloudを導入しています。

基幹系システム全体は、IBM Cloudのベアメタル・サーバー2台でハイ・アベイラビリティ構成にして可用性を確保し、各サーバー上にVMwareを導入して仮想環境を構築し、これまで11台の物理サーバーに分散していたシステムを集約しました。また、ディスクとサーバーのLANを分離しネットワークの負荷を分散して、パフォーマンスを確保するとともに、既存の情報系システムとITリソースを共有することで運用の効率化とコスト削減を図っています[図]。

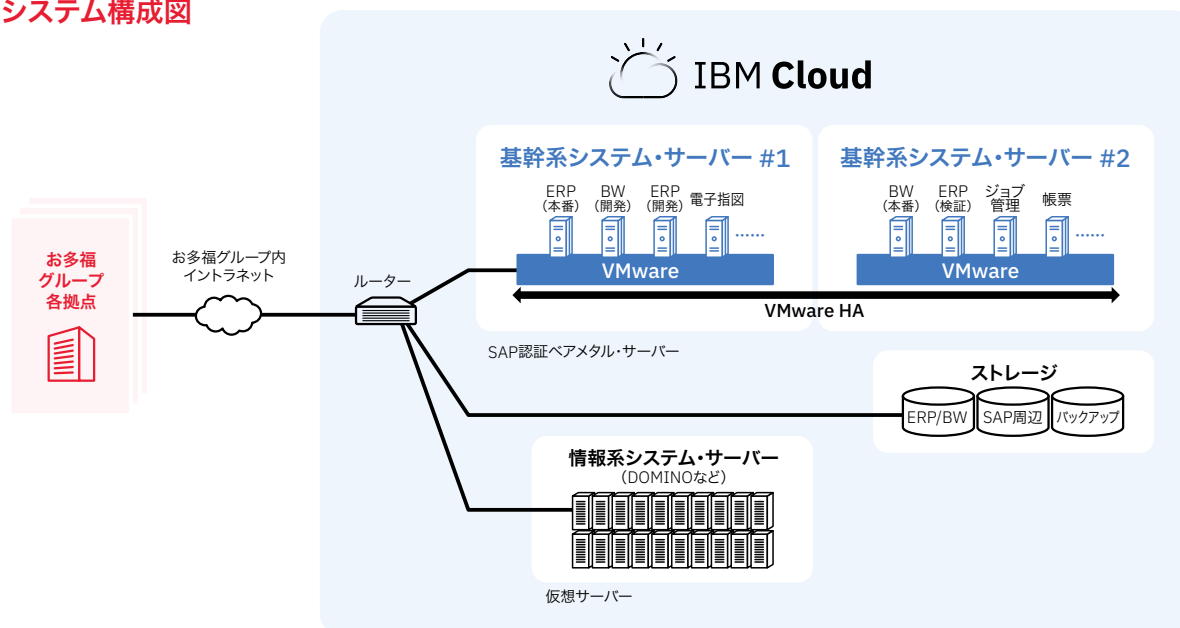
「すべてのシステムに対してオンプレミスと同様に、時間をかけて厳しいテストを入念に行いました。移行の際のリスクを避けるために、発注システムを除く全システムを、大型連休中に一斉に新システムに切り替えました」と高野氏は説明します。

パフォーマンスは劇的に向上し、ユーザーからも高い評価を得ています。以前は4、5時間を要していた夜間のバッチ処理も2、3時間に短縮されました。



オタフクホールディングス株式会社
経営企画部 IT企画課
シニアスタッフ
岩井 基氏

システム構成図



【効果/将来の展望】

インフラの運用管理に要する工数を圧縮し、より大きな変革を目指す

移行による効果はすぐに現れました。「パフォーマンスは大幅に向上し、ユーザーからも高い評価を得ています。以前は4、5時間を要していた夜間のバッチ処理も2、3時間に短縮されました。CPU、メモリー、ストレージの機能がそれぞれ向上していることが効いています。クラウド化したことでBCPの観点からもシステムの可用性が向上しました」と岩井氏。

高野氏も、「ハードウェア障害への対応が不要となり、ITインフラの運用管理に割かれていた工数が激減したことに加え、システム担当者の精神的な負荷も大きく軽減されました」と続けます。

クラウドの選定に時間を要しましたが、移行は計画通りに進みました。「途中で多少の問題が発生したこともありましたが、IBMは検証と確認を行い、“この程度ならば問題ありません”と経験に基づいた助言をしてくれました。こうした判断は自分たちだけでは難しかったと思います」(岩井氏)

オタフクソースでは、今回のプロジェクトによってほとんどのシステムがクラウド化されました。今後は必要なITインフラを、時間をとられることなく用意できるようになります。そこでシステム部門に求められるのは、業務の中に入り込んで、より大きな変革に寄与していくことです。

「業務の生産性が向上してシステム担当者が新しいことに取り組む時間も捻出できるようになります。クラウドによってAIやRPAといった新しい技術の活用も検討できるようになったため、IBM Watsonなども検討していきたいと考えています」と高野氏。情報系と基幹系の両システムのクラウド化を果たしたオタフクソースでは、次なる展開に向けて着実に準備を進めています。



otafuku

オタフクソース

〒733-8670 広島県広島市西区商工センター七丁目4番27号
<https://www.otafuku.co.jp/>

お多福グループは、1922年に広島で創業した酒と醤油の卸および小売の「佐々木商店」を出発点とする。現在、オタフクソース株式会社を中核に、国内外9社でグループを形成し、ソースや酢、たれ、各種調味料の製造販売を行っている。オタフクホールディングス株式会社は、お多福グループの事業企画立案・各事業会社の統括管理などを主な事業とし、グループ全体の管理サポートを主に行っている。



©Copyright IBM Japan, Ltd. 2019

〒103-8510 東京都中央区日本橋箱崎町19-21

このカタログの情報は2019年1月現在のものです。仕様は予告なく変更される場合があります。記載の事例は特定のお客様に関するものであり、全ての場合において同等の効果が得られることを意味するものではありません。効果はお客様の環境その他の要因によって異なります。製品、サービスなどの詳細については、弊社もしくはビジネス・パートナーの営業担当員にご相談ください。IBM、IBM ロゴ、ibm.com、Domino、IBM Watson、および Watson は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM 商標リストについては www.ibm.com/legal/copytrade.shtml をご覧ください。